

天 界

第百十三號 (第十卷) 昭和五年九月

我が學界に望ましき事ども (其の三)

(卷頭言)

去る七月中旬頃、全國の日刊新聞が伊太利國ゼノアに於ける 庭球デビス杯戰の準決勝試合ひに、我が國の選手たちが奮闘の 狀況を報じたことほど 近頃快心のニウスは無かつた。尤もあの試合ひは、惜しくも我が軍は敗れたけれど、其の戰績といひ、其の 態度といひ、全歐の最強敵を向ふにまはしての武者振りは、實に見事に 國光を輝やかしたものであるが、尙ほ、殊に、かくの如き優秀な闘士が東洋の一角から風雲の 如く現はれて、全世界人士の膽を冷からしめたことは、我が 邦人の力量が決して歐米人に比して劣るものでない事實を最も端的に現はすものである。

敢へて自惚れるわけではないが、近代世界の 文化史上に於いて我が日本の出現は全く驚異に値するものである。但し、我が 國の眞價は、特に鋭眼の批評家によらざる限り、第19世紀末までは 全く世界的に未知數であつたわけであるが、かの 日清戰役や日露戰役に於いて、俄然、世界の舞臺に現はれた。しかし、此等の 戰績のよるも尙ほ、世の多くの批評家は、我が國民が只すぐれた武勇一逼の 傳統を追ふ一民族であるとのみ見、戰爭以外の文化活動には、歐米人と比して、全く 比較にならない劣等種であるかの如く見たのであつて、こうした 意味の批評家は、諸外國のみならず、我が國內にも少なからず存在してゐたのである。

しかるに最近の社會百般の狀勢を見るに、わづかに 過去半世紀の「新興國」でありながら、内治、外交、産業、交通、文教、學術等の、あらゆる方面に於ける我が國の活躍ぶりは實に堂々たる世界第一等國の名に 相應しい

ものであつて、最後に、只、肉體を資本とするスポーツ界だけは「やはり何としても世界の舞臺に乗り出し得ないものか」と思はしめたに拘らず、前記の庭球の例のみならず、一昨年のオリムピック競技等の成績は、こゝにも亦わが國民體力の決して人後に落ちない優秀さを證明しつゝある。——も早や、こうなつて見ると、民族としての我が國人は、公平なる批評眼の前に晒されて、決して何の杞憂も無い素質の持ち主たるを自證するものである。

ひるがへつて、我が國の天文學界を見るに、こゝは前記の事状とは打つて變つて寂涼そのものの感を深くする。最近數年來、新しく輩出しつゝある若い天文家の群れの盛んなる事は前號にも記した。しかし、之等の多望なる人士を活躍せしむべく今與へられてある國內各天文臺の研究設備は如何であるか!? 「天文臺」として内外に吹聴し得るものは、東京と京都の二ヶ所に留まるのであり、更に此の兩天文臺の内容なるものを點檢して見ると、京都の46センチ反射鏡や30センチ屈折機といひ、東京の20センチ屈折機といひ、何れも此等は歐米の地に於いて、第十九世紀の初頭乃至中葉頃に使用された程度のものに過ぎない。換言すれば、我が國の天體觀測設備はほゞ百年前の時代的器械のみである。只、今明年中に、三鷹では經65センチの一屈折機が完成する由であるが、之れのみを以つて、英米獨露あたりの何所の天文臺と相伍せんとするのであるか!

餘りに桁外れの貧弱な我が國天文設備を見て、今まで、世には、我が國の天候が先天的に思はしくないためであると考へたり、又、中には、我が國の天文家の能力を餘り多く期待しなかつたりする批評者も無いでは無いけれど、此等の批評が何れも根本的に不當であることは明白であり、又、天文學以外の諸種の世界學術場裡に我が學者たちが占めつゝある優れた地位に見るも、決して我が理學者の能力は最優級以下では無い筈である。して見ると、現在の我が天文臺が衰へたる劣等設備を恨みつゝある原因は、只、要するに官權や一般社會が曆時の算定や、航海測地の術以外に廣き天文學の文化的意義を正解せず、又、天文家自身も此等枝葉の術のみに慣れた「技師」の名に甘んじて、大宇宙探求の如き人間文化の最高所を狙ふ熱

心と自覺とに缺くる所があるのでは無からうか？ あへて、學内學外の諸賢の一考を煩はす所以である。

我が日本民族の理學研究能力を歐米人の其れに劣るとする一派の評家に告ぐ。「枯く、歐米人と吾が國人とに均等なる研究機會を與へよ！」現在の如き明白なる機會(設備)不均等のハンデキャップを與へて、彼れと我れとの優劣を比較するは不當も甚だしいではないか！

花 山 だ よ り

七月の初め、水澤から川崎理學士が來られ、一兩日滞在せられました。中旬には山本臺長は東海地方へ出張せられ、十九日からは森川千田兩氏が滿洲へ出張せられたなど、可なり人々の動靜がありました。

夏期の志願助手希望者は合計九名ありましたが、其の中から、山邊、鹽見、原田、西(女史)の四氏が七月下旬から花山へ來られることになりましたので、初め氣遣はれてゐた夏休み中の淋しさも無く、毎日、山の上は、なかなか賑やかなものです。八月九月には又、別の人々が來られる 豫定です。

七月末には流星の小嶺氏が來られ、四五日宿泊されました。其の間に流星の觀測もされました。近頃の大發見は、稀代の銳眼の持ち主鹽見君が發見されたことです。或る批評によると、中村氏以上とも言はれます。將來、流星や變光星の方面に活躍されませう。

八月一日からは、大學の天文教室で、夏期講演として山本臺長の「天文學一般」が開講され、合計四十八名の人々が遠近からやつて來て熱心に聽講されました。同時に大學内で開かれた諸種の講演のうち、この「天文學」の聽講者が一番多數だとして、庶務課長始め、大喜びでした。

八月八日には水澤の山崎正光技師が來觀せられました。十七日から山本教授は倉敷行きで不在。二十一日から暫くは神戸の改發氏が來られて、天體寫眞術の研究をせられます。

柴田氏の25センチ F₃ といふ優秀機が目下組み立て据え付け、